

群 教 セ	J01 - 01
	平14.206集

外国籍児童と協力して生活できる児童 を育成する指導の工夫

- パスポート活動の展開を通して -

特別研修員 境野 博之

《研究の概要》

本研究は、外国籍児童への関わり方の中にある問題点に気づき、それを改善する実践的な活動を通して人権感覚を豊かにし、外国籍児童と協力して生活できる児童を育成しようとするものである。具体的には、外国籍児童への関わり方の中にある問題点に気づき改善への意欲を育成する活動、コミュニケーションのとり方を創意工夫する活動、外国籍児童と進んでコミュニケーションをとろうとする意欲を高める活動を通してねらいに迫った。
【キーワード：小学校 学級活動 人権尊重教育 国際理解 コミュニケーション】

主題設定の理由

県内屈指の工業地域である東毛地区に位置する本町では、企業における労働力不足を解消するために、平成元年以来、南米を中心とした海外からの日系人労働者の居住が始まった。平成14年5月現在、本校には85人の外国籍児童が在籍し全校児童の約15%を占めている。このように急速に国際化し、日系人の定住化が進んでいる現状の中で、自他の存在を意識し始める高学年の児童にとって、国籍に関係なくだれとでもコミュニケーションをとりながら、豊かな人権感覚を育成していくことは、文化や習慣が異なる外国人と共生していく上で大変に重要であると考えられる。

本学級の児童（小学校5年、男子13名、女子18名のうち外国籍児童は男子2名、女子2名）は、素直で活動的な児童が多く、清掃活動や作業的な活動には積極的に取り組んでいる。また、あいさつや言葉づかいなどの基本的な生活習慣が身に付いている児童が多く、互いに思いやりの気持ちを持って生活している。しかし、友達のよいところを進んで見つけようとしている児童は少なく、互いのよさを認めながら自分も成長していこうという態度は十分に育成されているとは言えない。外国籍児童に対しては、表面上は協力して学習や作業を進めているように見えるが、小グループで活動をする場面では外国籍児童を敬遠したりすることがある。また、休み時間に日本人児童と外国籍児童が混じって遊んでいる姿はあまり見られない。その原因としては、友達が気の合う仲間限定されていて、疎外されがちな外国籍児童の気持ちに気づいていないことや言葉が十分に通じないのでコミュニケーションのとり方が分からないことが考えられる。また、日本語習得のために特別なカリキュラムで学習をしているので、外国籍児童は遅れているという偏見を持っていることも考えられる。これらのことは、だれとでもコミュニケーションをとりながら、人権感覚豊かな児童を育成する上で大きな障害となっていくと思われる。

そこで、本研究では、学級活動において外国籍児童に対する関わり方の中にある問題点に気づき、それを改善する実践的な活動を展開することによって、コミュニケーションのとり方を児童が自ら学び、偏見にとらわれることなく誰に対しても公正・公平に振る舞おうとする基本的人権尊重の精神や仲間意識が高まり、外国籍児童と協力して生活できる児童が育成できる

あろうと考え研究主題を設定した。

研究のねらい

外国籍児童への関わり方を見直し、その中にある問題点に気づき、それを改善する実践的な活動を通して、人権感覚が豊かになり、外国籍児童と協力して生活できる児童を育成することができることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

小学校5年生の学級活動において、以下の見通し1～3を展開することによって、人権感覚が豊かになり、外国籍児童と協力して生活できる児童を育成できるであろう。

- 1 学級活動 で、人権意識調査結果を考察する話し合い活動で、外国籍児童に対する関わり方に問題があることに気づき、ロールプレイを活用して、体験的に相手の気持ちを理解すれば人権意識が高まり、分け隔てなく外国籍児童と接していこうとする意欲が育成されるであろう。
- 2 「パスポート活動」において、各自で工夫した改善策を実践し、学級活動 でその結果を発表したり、実践方法に改善を加える話し合いをすれば、外国籍児童とコミュニケーションをとる方法が広まるとともに、児童自らがコミュニケーションのとり方を主体的に創意工夫していくことができるであろう。
- 3 学級活動 で「パスポート活動」の成果を確認し、この実践を日常化するための具体策づくりをする話し合いをすれば、人権感覚が豊かになるとともに外国籍児童と進んでコミュニケーションをとろうとする意欲が高まり、外国籍児童と協力して生活できる児童が育成されるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え

(1) 「外国籍児童に対する関わり方の中にある問題点」とは

本学級の児童は入学以来、外国籍児童と一緒に学校生活を送ってきているが、日本人児童は外国籍児童を疎外していて、話しかけたり、一緒に遊んだりすることが少なく、外国籍児童の気持ちを理解しようとしていないという問題である。児童には、人権意識調査の事後指導の中で問題点に気づかせていきたい。具体的には以下の項目を追究しながら問題点をとらえていく。

あなたは、だれとあいさつをしたり、あいさつを返したりしていますか。

あなたは、休み時間にだれと遊びますか。

あなたは、だれと協力して学習や係・当番の仕事をしていますか。

あなたは、困っている友達を見かけたら、助けてあげられますか。

あなたは、友達が人の嫌がることを言ったりしたりしていたら「やめよう」と言えますか。

あなたは、友達のよいところやがんばったことを進んで見つけようとしていますか。

(2) 「パスポート活動」とは

「パスポートカード」を使って、外国籍児童とコミュニケーションをとるための実践力を養

っていく活動である。第1回目の活動は、各自で工夫した方法を「パスポートカード」に記入したり、実践結果を記録したりしながら改善策を模索していく。第2回目の活動は、前回の実践結果の発表をもとにした改善点の話し合いを参考として新たな改善策を創意工夫し、さらに実践を広めたり深めたりしていく。

(3) 「人権感覚が豊かな児童」とは

身の回りの生活の中にある偏見や差別に気づくだけではなく、その解消に取り組もうとする意欲と実践力を持った児童のことである。本校では、資料1のように人権教育で育てる素地として9項目を設定して指導しているが、本研究では以下の2点に絞っていく。

資料1 本校の人権教育で育てる素地

基本的人権の尊重	生命尊重
勤労尊重	合理性・科学性
仲間意識	自主・自立意識
基本的な生活習慣	豊かな情操
学習習慣	

基本的人権の尊重...友達を分け隔てすることなく誰に対しても公正・公平に振る舞う児童
仲間意識...友達のよいところを認め、友達の立場に立って考え、互いに協力し合う児童

(4) 「外国籍児童と協力して生活できる児童」とは

外国籍児童とコミュニケーションを取る方法を創意工夫し、進んで話しかけたり、一緒に活動することができるだけでなく、偏見にとらわれることなく外国籍児童のよいところを進んで見つけながら、共に向上していこうとする児童のことである。

(5) 研究における全体計画



2 実践の概要

考察にあたっては、学級全体と抽出児A男（「パスポート活動」の授業前は外国籍児童と話をしたり遊んだりしたことがなかった）の活動の様子やワークシート、パスポートカード等の記述の分析を通して行う。

(1) 人権意識調査結果を考察する話し合い活動によって、問題点に気づき、その改善に意欲を持つことができたか。(見通し1)

ア 実践の概要

学級活動「5の2を見直そう」において、事前にとった人権意識調査結果(資料2)の「友達によってはしている」という回答に着目し、その内容を追究しながら外国籍児童に対する関わり方の実態を明確にしていった。そして、自分たちのクラスをより良くするためには、これからどんな点を伸ばしていったり、変えていったりしたらよいかを班で話し合い、改善策をロールプレイを活用して発表する活動を行った。

資料2 人権意識調査結果(外国籍児童を除く)

項目	だれとでも	友達によって	していない
あいさつ	10人	15人	2人
遊び相手	12人	14人	1人
協力する	13人	13人	1人
助ける	13人	12人	2人
制止する	11人	11人	5人
よさ発見	8人		19人

イ 結果と考察

「友達によってはしている」という内容は、資料3のような結果であった。授業中に集計したので、外国籍児童の回答が含まれていることと、選択肢が細分化されたことにより「だれとでも」という概念が明確になったために資料2とは数値が一致していないが、この結果に対して、多くの児童が「外国籍の子もっと接した方がよい。」といった感想を述べた。中には「このクラスは外国籍の子には、何もしていない。かわいそう。外国籍の子たちを違う目で見て感じる感じがしました。」とか「外国籍の子との行動が1つもなかった。ちょっと信じられない。」といった感想を発表した児童もいた。これらの発表を通して、友達が気の合う仲間限定されていて外国籍児童を疎外していたことや外国籍児童の気持ちを理解しようとしていなかったという外国籍児童への関わり方の中にある問題点に気づくことができたと考えられる。

資料3 「友達によってはしている」ことの内容

項目	仲のよい子	同じ班の子	外国籍の子
あいさつ	19人	0人	0人
遊び相手	19人	0人	0人
協力する	10人	3人	0人
助ける	14人	2人	0人
制止する	10人	0人	0人
よさ発見	23人	4人	0人

また、改善策を話し合い、それを発表するロールプレイでは、休み時間に友達と遊んでいる場面や授業中のようすを再現しながら楽しそうに活動ができた。活動の感想として、A男は資料4のように書いていた。他の児童からも「外国籍の友達の意見に反対する役で

資料4 A男のロールプレイの感想

3. 発表の時の役割と、その役割をして感じたこと。
 外国籍の子が「いかに遊ぼうか」と言ってきたとき、
 気持ちがよくなった。

した。外国籍の友達を大切にしたいです。」という感想が寄せられた。ロールプレイを活用することによって、外国籍児童の疎外されたときの気持ちを体験的に理解することができたと考えられる。

そして、A男は授業の感想を「友達よさを見つけようとしている人が、僕の班では1人しかいなかったの、今度からは外国籍の子やおとなしい子でもよさを見つけてあげようと思った」と述べ、これからやってみたいこととして「今度からは、だれとでも遊ぼうと思った。」と書いていた。今までに外国籍児童と話しをしたことがなかったA男の様子から、外国籍児童への関わりの中にある問題点に気づき、ロールプレイを活用して体験的に相手の気持ちを理解することによって人権意識が高まり、問題点を改善していこうという意欲を育成できたと考えられる。

(2) 「パスポート活動」によって、外国籍児童とのコミュニケーションのとり方を創意工夫できたか。(見通し2)

ア 実践の概要

学校生活や学校行事の中で「パスポート活動」を2回展開した。第1回目の活動は、外国籍児童とコミュニケーションをとる方法を各自が工夫し、それを「パスポートカード」に記入し、1週間の実践を行った。学級活動の時間に、実践結果を「パスポートカード」に整理して発表した。発表された実践結果を分類して、パスポートマップを作成した。そして、個人の実践を班や学級の実践へと広めたり発展させるために、実践結果の改善点を班で話し合い、その結果をアドバイスカードにしてパスポートマップに添付した。第2回目の活動は、次週に予定されている林間学校での実践策を班で相談し、「パスポートカード」に記入し、その後も含めた1週間の実践を行った。

イ 結果と考察

第1回目の「パスポート活動」では、何をしてもよいのか分からず、外国籍児童への実践が考えられない児童が多かった。そこで、活動に入りやすくするために、外国籍児童へと限定しなくてもよいことを伝えて活動を開始した。実践結果がまとめられた児童は10名だけだった。実践内容は、「外国籍の子とたくさん話す」といった外国籍児童への実践が3名、「だれとでも遊ぶ」、「困っている人を助ける」、「あまり話をしていない人と話す」といった外国籍児童への実践とは特定できない実践が7名であった。外国籍児童を特別な存在として自分たちから切り離して生活していた多くの日本人児童には、1回目の「パスポート活動」は大きなとまどいを与えたものと考えられる。

学級活動では、10名の実践結果の発表に対して、児童は19枚のアドバイスカードを添付することができた。「外国籍の子とたくさん話す」という実践結果に対しては「休み時間に話すといい」や「給食がチャンス」などのアドバイスが出された。外国籍児童への実践とは特定できない実践にも、「国籍関係なく助けた方がいいと思います」「外国籍の子が困っていたら助けてあげよう」などのアドバイスが出された。A男は実践結果を発表することはできなかったが、アドバイスカードには「だれでも助ける」と記入して、パスポートマップに添付することができた。個人の実践策に改善を加える活動を通して、外国籍児童とコミュニケーションをとる方法が広まったとともに、児童自らが

資料5 A男のパスポートカード

だれとでもコミュニケーションをとろう	
班で考えた方法	外国籍の子にやさしくしたり、分からないところを教える。特に授業中。
やってみたこと	ヒカルド君のお父さんが亡くなってしまうと、お線香をあげに行ったときにヒカルド君をなぐさめた。
相手のようす	すごく喜んだ。
やってみた感想や気がついたこと	外国籍の子でも話をしたらすごく喜んだから、もっと話をしたいと思った。

コミュニケーションの取り方を主体的に模索し始めたと考えられる。

第2回目の「パスポート活動」では、16名の児童が実践結果をまとめることができた。そのうちの11名は2枚のパスポートカードを提出することができた。A男も資料5のような「パスポートカード」をまとめることができた。A男の実践内容は、林間学校で親しくなった外国籍児童の父親が急死したことを知り、その通夜に3人の友達と個人的に行ったときのものである。このように合計2回の「パスポート活動」と実践方法に改善を加える話し合いを通して、児童は外国籍児童とのコミュニケーションのとり方を主体的に創意工夫していくことができたと考えられる。

(3) 「パスポート活動」の成果を確認することによって人権感覚が豊かになり、外国籍児童と進んでコミュニケーションをとろうとする意欲を高めることができたか。(見通し3)

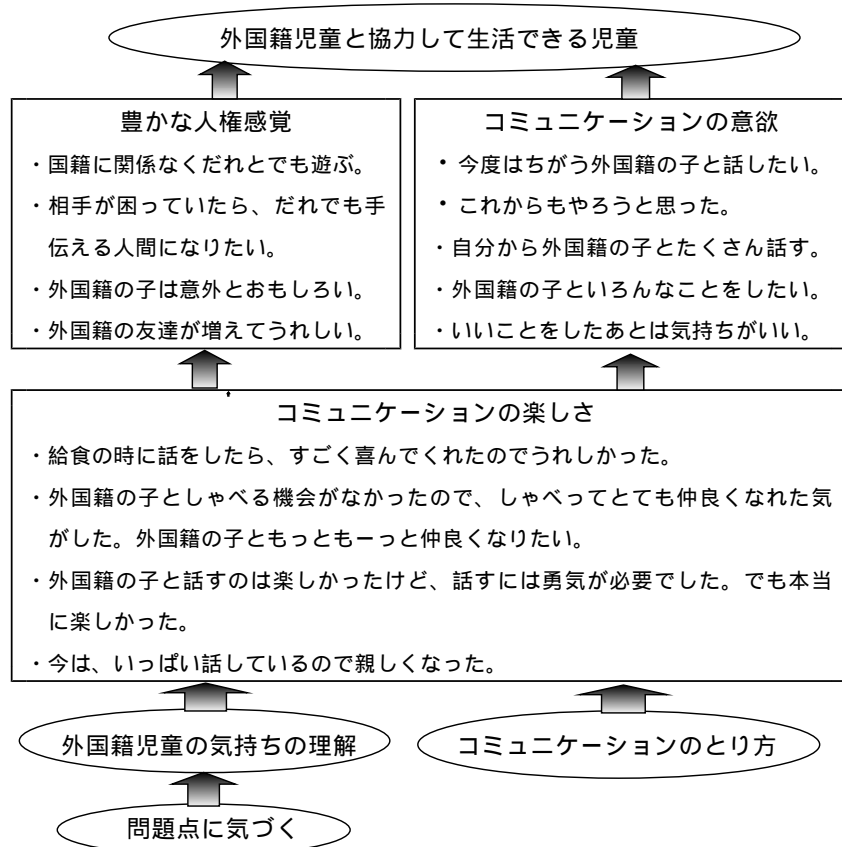
ア 実践の概要

学級活動の時間に「パスポート活動」を振り返り、外国籍児童の感想を聞いたり外国籍児童とコミュニケーションをとってよかったことや外国籍児童のよさに気づいたことを発表し合って「パスポート活動」の成果をまとめた。そして、5年2組をより楽しくより良いクラスにするために、今までの実践活動をどのように生かしていったらよいかを話し合い、具体策を考えた。

イ 結果と考察

外国籍児童は、「パスポート活動」の感想を「前は日本の子は、あまり話をしてくれなかったが、よく話をしてくれるようになった。学校が楽しくなった。」と発表してくれた。そして、「パスポート活動」の成果として発表された発言やワークシートに記述されたものを構造的に整理したものが資料6である。

人権意識調査の事後指導の中で、外国籍児童に対する関わり方の問題点に気づき、ロールプレイを活用して、体験的に外国籍児童の気持ちを理解することにより、友達を分け隔てすることなくだれにでも公正・公平に振る舞おうとする「基本的人権の尊重」の精神が涵養され、「パスポート活動」を通じて外国籍児童のよさに気づくことにより、「仲間意識」が芽生えていったと考える。そして、「パスポート活動」を振り返り、その成果をワークシートに記述したり、発表したりすることによって、「基本的人権の尊重」と「仲間意識」が明確に意識化され、共



有化されることによって、豊かな人権感覚へと高められていったと考える。

また、外国籍児童への関わり方を実践しながら創意工夫する「パスポート活動」を通して、コミュニケーションのとり方を児童自らが学び、コミュニケーションの楽しさを味わいながら外国籍児童とコミュニケーションをとろうとする意欲を高めていったと考える。

さらに、5年2組をより楽しくより良いクラスにするために、今までの実践活動をどのように生かしていったらよいかという話し合いでは、「外国籍の子やおとなしい子が仲間はずれになっていたら仲間に入れてあげる。」や「性別や国籍に関係なく、だれとでも遊んだり、話したり、助けたりすると良いと思います。」という意見が多数出された。今までの実践を生かす具体策を考える事によって、外国籍児童と進んでコミュニケーションをとろうとする意欲が持続力を持ったものへと高められていったと思われる。

A男は今回の活動を振り返って、「外国籍の子と仲良くしたりしたからクラスがすごく変わったと思う。外国籍の子やおとなしい子、だれとでも話したりすればきっと5年2組はいいクラスになると思う。」と述べていた。「パスポート活動」の授業前は外国籍児童と話をしたり遊んだりしたことがなかったA男を始め、多くの児童が「パスポート活動」の成果を振り返ることによって、人権感覚が豊かになるとともに外国籍児童と進んでコミュニケーションをとろうとする意欲が高まり、外国籍児童と協力して生活していこうとする姿に変容したことを確認できた。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

人権意識調査結果から、外国籍児童に対する関わり方の問題点を明確にしていく活動は、日本人児童に対して、外国籍児童を自分たちと共に学校生活を送る仲間としての認識が希薄で、特別な存在として自分たちとは切り離して生活していたことを気づかせ、人権意識を高めるのに大変有効であったと考える。

外国籍児童とコミュニケーションをとるために、2回の「パスポート活動」を展開したことは、外国籍児童とのコミュニケーションのとり方を広め、児童自らがコミュニケーションのとり方を主体的に創意工夫していくのに極めて効果的であったと考える。

2 今後の課題

「パスポート活動」を通して、児童の生活態度に大きな変容が見られたので、この実践力をさらに確かな行動規範として身に付けていけるよう、道徳や総合的な学習の時間と効果的に関連づけた人権教育や国際理解の総合単元的な学習を計画し、実践していく必要があると考える。

<参考文献>

- ・落合 良行 編著 「小学5年生の心理」 大日本図書(2000)